教育のあゆみについて、高橋寛前会長よりシリーズで振り返っていただく、今回は第２回です。

寄稿　岩手の生涯学習物語　（草創期編）

元岩手県教育委員会社会教育課課長　高橋　寛

第二話「社会教育の総合化」の巻

「生涯教育の提唱は岩手が世界初」と前回お話しました。なぜ岩手にそんな高邁な理論が生まれたのでしょうか。今回はその誕生と背景のお話です。

戦後の社会教育の姿

昭和20年、第二次世界大戦が終結。敗戦の混乱の中に新しい民主国家日本の建設が始まりました。社会教育もその例外ではありません。米国占領軍は16ミリ映写機「ナトコ」26台を岩手に貸与、巡回映画会が始まりました。娯楽が乏しかった当時、映画会はどこも満員。

帰国した若者は青年団に集まり活動を開始。運動会に盆踊りに演芸会。それはそれはエネルギッシュでした。生活の向上には婦人会が立ち上がりました。とりわけ台所改善に成果を上げ、やがて女性の地位向上に運動が発展します。

6・3・3・4制に基づく学校教育もスタート。それに呼応して新しい社会教育団体PTAが誕生、力強く活動開始。子ども会活動も熱を帯びて行きました。

寺中構想に市町村合併

中でも注目されるのは公民館活動、文部省社会教育局長寺中作雄氏が唱えた公民館のあるべき姿は「寺中構想」と呼ばれ、当初「青空公民館 」（施設も設備もない活動だけの公民館）と呼ばれ、「物なく人なく金もなし、願いはあれどやる気もなし」などと揶揄されながらも、公民館は徐々に整備され活動が充実して行きました。

そして昭和28年「市町村合併促進法」が制定され新しい市町村が誕生。「町づくり村づくり」の活動が力強く展開され、社会教育は上昇の一途を辿ります。

社会教育行政も「青年団構造改革論」や「婦人教育の再編成」、「PTA活動の手引き」や「公民館活動の手引き」など各種のガイドブックを発刊し住民の活動をサポート。

そして、新たな課題

このように、社会教育活動は年々拡充して行ったですが、新しい課題が生じて参りました。

それは「青少年、婦人、一般成人を対象とする社会教育が、目的そのもののように個別的に独走し、また団体、学級講座、集会行事等の社会教育形態が相互の関連における位置役割を確立できないままバラバラに導入され、目標や内容にいたっては、更に重複し競合して活動の成果を停滞させている」（「教育基本計画」272頁）ことでした。

社会教育の総合化

そこで昭和37年度、これまでの社会教育の欠陥を克服し、社会教育の今日的役割を具体化するために、「地域の共通課題解決という主導目標を核に社会教育全体の活動の総合化」が提案され、「ゆりかごから墓場までの生涯にわたる教育編成が充実強化されなければならない」（ibt）と提言し、社会教育の対象を生涯わたる人間の生活行動なり発達課題から捉え直し、これに対応する学習内容・学習方法・学習の場を総合的に組み立てることとしたのです。この「社会教育の総合化」こそが岩手の生涯育の原点なのです。

岩手の誇り

如何ですか、皆さん。岩手の生涯教育は戦後の社会教育の実践をもとに、新しい社会教育の発展のため生み出された実践理論なのです。厳しい現実の生活を見つめ、課題解決を考え、創意工夫を凝らし力を併せて歩み続けた末に編み出された珠玉の理論と言えるのではないでしょうか。私はこの先達の歩みを誇りに思います。高村光太郎は詠いました。「岩手の人、地を行きて駆らず、ついになすべきをなす」と。まさにその通りです。

次回は、この理論「生涯教育」がどのように社会教育行政に登場するのかお伝え致しましょう。